

新刊 紹介

“... the difference between a collage man and a man lacking in college is that he has the resource of books, that he knows there's a book side to every-thing.”

田畑 忍著（法学部教授） 人物叢書 児島惟謙

日本歴史学会編集、発行所、東京、吉川弘文館、新書版二一四頁 定価二四〇円
明治を代表する偉大な法曹人、児島惟謙の伝記が出版された。本書の著者が、「確かにやり甲斐のある仕事」として執筆にとりかかった機縁については次のように記せられている。「私が……その伝記を書くことになったのは彼の本家の若き当主である緒方真澄君の修士論文の指導と、児島惟謙研究を私が激励したことに由来している」と。

本書は通常の伝記の形式にとらわれず、

第一「家系」、第二「生涯」、第三「性格」と書きすすめられ、第四「大津事件における児島惟謙」に本書の主力がそそがれている。時の大審院長として、しかも任命されて数日後、突発的に起こった大津事件に遭遇して、遂に司法権の独立を守る使命を果たすこととなった「護法の巨人」がもっとも詳しく記述されている。第五「児島惟謙と教育事業」において、とくに興味のあるのは彼の「同志社大学設立運動に対する援助」である。さきに同氏が、大阪の控訴院長に在任中、新島先生の「大学設立之旨意」に共鳴するとともに、同志社のために、大阪方面における募金の勧誘につくすところもすくなくない。彼の甥の緒方徳一郎と長男正一郎の教育を新島先生に托して、同志社英学校におくられたいきさが詳しく述べられている。かくて最後に、「彼の現代との関係において」家永三郎教授の児島批判に対して、その駁論がなされている。「人権尊重に徹して権力に対決する精神と実践とが、殊に憲法の番人としての裁判官に期待される」所以が説かれている。緑陰のもと、好個の良書としておすすめしたい。

住谷悦治編（経済学部教授） 「日本における

キリスト教と社会問題」 発行所、東京、み

ず書房 四五〇頁 定価一二〇〇円

本書は同志社大学人文科学研究所々員の論文集であり、表題にある通り、明治、大正、昭和にわたるキリスト教社会問題に関する貴重な資料を提供するものである。同研究所は昭和三十一年以来、文部省及びハーバード・燕京研究所から研究費の助成を受けて、①明治以来のキリスト教社会問題に関する資料の蒐集 ②研究雑誌「キリスト教社会問題」の発行を続けて来た。ところが、最近、全国の研究者から既発表論文の刊行を望む声が多くなり、要望に応えて本書を発行することになったもの。本書には「キリスト教社会問題」第一号から第五号までに掲載された主要論文が集められている。筆者はすべて同志社の教職員で、住谷悦治・明治キリスト教徒の社会主義思想、高橋虔・日本の近代化とキリスト教、篠田一人・自由キリスト教と社会運動、竹中正夫・日本におけるキリスト教と社会問題、田畑忍・内村鑑三の戦争と平和に関する政治思想、土肥昭夫・内村鑑三の無教論、嶋

田啓一郎・中島重の社会哲学と社会的基督教、杉井六郎・諜者報告から見た明治初期外人宣教師の活動、今中寛司・横井小楠の実学と西教、田中良一・熊本バンドと同志社、平林一・芦花と現代文学、西村豁通・山川均と労働運動、高屋定国・山川均の「方向転換論」に関する一考察、小倉襄二・留岡幸助とその周辺、岩井六男・丹波地方におけるキリスト教の受容のほか新たに辻橋三郎・岩野泡鳴とキリスト教、住谷申一・海外新聞と浄世夫彦の二論文が加えられている。いずれも同研究所の数万点にのぼる貴重な資料をもとにして書かれたもので、戦前のキリスト教社会問題を研究する者には必読の書となる。

篠田一人著（文学部教授）「人間学としての哲学」発行所 京都、法律文化社、A5版 二七三頁 定価六八〇円

「哲学的知識と思考の世界への案内書」として書かれた本書は第一部「哲学の概念とその歴史の変遷」、第二部「人間学としての哲学」の二つの部分からなっている。第一部は、いわば、哲学入門に当たるもので哲学の定義、哲学と哲学史など哲学概念の

説明およびギリシア時代から現代にいたるまでの哲学思想の系譜をのべ、第二部への導入部の役割を果たしている。第二部で、著者は「歴史的人間学」というユニークな理論を展開し、内容的にも、量的にも本書の中核をなしている。ここでは今日の哲学における人間と歴史の問題がとりあげられ、とくに人間学の諸問題に関する思想が考察されている。著者によれば、現代哲学の中心問題は人間存在の根本原理を探究することである。そして、その際「人間を、

自然的存在として考えるよりも、むしろ、歴史の中の存在として理解することが大切である」と説き、歴史的人間学の構造を明らかにすることによって、相対立している諸原理が緊張し、抗争している現実世界のなかにおいて、不安と破局に直面している人間の生活と行動を究明せんとしている。

本書は、いわゆる、「哲学概論」ではなく、人間と歴史の問題にふれつつ、今日の哲学思想の問題点を解説、論究しているので、全体としての哲学の姿を把握できる。また、きわめて平易にかかれ、引用文献も入手しやすいものに限っているので教養書

として親しみやすいものとなっている。

三代言論人集 発行所、時事通信社、B6版 三四六頁、定価三五〇円

本書は明治の三大新聞人「黒岩涙香」を小野秀雄、「徳富蘇峯」は阿部賢一、「渡辺三山」を笠信太郎の三氏により執筆。いずれも一流のジャーナリズムの経験もあり、淨々たる評論家。各編毎に、評伝と文章に別けて掲載され、文章流麗、平易にして簡にして明。阿部賢一博士（校友）は蘇峯の女婿にして本人を熟知せられる最適の人、却って批判し難いと懸念したが、その筆端は岳父に対して遠慮なくメスを振っていることは見上げたもの。各章に氏独特の見解に興味をそそる。特に蘇翁の終戦前後の動静は悲劇の場面であるが、せきららに記載され、しかも有史以来百巻の修史を完成されたその勇猛心と忍耐と筆力に驚嘆の声を発するのは、ただに筆者のみでない。翁は新聞記者の職分三種として次の如く評している。

一、曰く、代表的。二、曰く、批評的。三、曰く、指導的。この書は近來の良著として推奨に値する。（半）